

論文

昭和前期の日本女性の会計学教育に関する事例研究（Ⅰ） ー吉田良三「女子簿記教科書」をジェンダーの視点からの考察ー

小泉友香

〈論文要旨〉

本稿は、昭和前期の高等女学校実科・実科高等女学校で使用された吉田良三著『女子簿記教科書』（1936）（修正再版・文部省検定教科書）を現代語訳し、その内容をSDGs目標4およびジェンダーの視点から検証することで、当時の女性学習者向けの会計学教育の状況を考察している。具体的には、同著者による男性学習者向けの文部省検定中等学校教科書『中等簿記教科書』（1934）と比較し、特にジェンダーの視点から本書の特徴を分析した。その結果、本書では、男性学習者向けの教科書と比べて、単式簿記への習熟、複式簿記における伝票会計、そして例題演習がより重視されており、これらが当時の女性に期待されていた専門的技能を反映していた可能性を示唆した。また、本書のデザインと挿絵が女性学習者を意識して工夫していた可能性を示した。このような本書の特色とその歴史的背景の理解は、その後の会計学領域での女性の職業的活躍推進を考察する際においても有益であろう。国際社会の共通課題であるSDGs目標4に関連して、本書に見られるような女性の地位向上に向けた教育実践が先駆的な試みとして約90年前のわが国で実施されていたことは、今後の研究においても重要な参考資料となり得る。

〈キーワード〉

会計学教育、簿記教科書、ジェンダー、女性、SDGs、目標4、吉田良三、高等女学校

A Case Study of Accounting Education for Japanese Women in the Early Showa Period (Ⅰ): A Gender Perspective Through Ryōzō Yoshida's *Bookkeeping Textbook for Women* (1936)

Yuka Koizumi

Abstract

This paper translates *Bookkeeping Textbook for Women* (Yoshida, 1936), used in girls' high schools and vocational girls' high schools during the early Showa period, into modern Japanese and examines the state of accounting education for female students from the perspectives of SDG Goal 4 and gender. By comparing it with the same author's *Secondary School Bookkeeping Textbook* (1934), the study identifies features unique to *Bookkeeping Textbook for Women*, such as the emphasis on mastering single-entry bookkeeping, voucher accounting in double-entry bookkeeping, and exercise-based learning. These elements likely reflected the need for women to acquire specialized skills and advance socially. Additionally, the study highlights how the textbook's design and illustrations were tailored to appeal to female learners. These findings provide valuable insights into the historical background of women's professional participation and serve as important reference material for future research on SDG Goal 4.

Keywords

Accounting Education, Bookkeeping Textbook, Gender, Women, SDGs, Goal 4, Ryōzō Yoshida, Girls' High Schools

1. はじめに

日本公認会計士協会によれば、1951年に初の女性公認会計士が2名誕生して以来、公認会計士試験合格者に占める女性の割合は2018年に20%を超え、2023年現在の会員の男女別人数は、男性30,094人、女性5,480人であり、会員・準会員の女性比率は約15.4%とされる。また、同協会では、女性が働きやすい社会を実現するための取り組みの一環として、2018年に「女性会計士活躍の更なる促進のためのKPI設定の提案」を承認・公表しており¹、毎年多数の女性の公認会計士が誕生している。かかる女性の会計学領域における女性参画の進展の背後には、それを育んだ教育制度の変遷があったはずであり、SDGs目標4「質の高い教育」およびジェンダーの視点から昭和前期における女性の会計学教育の状況を理解することは有益であろう。

そこで、本研究は、昭和前期の高等女学校実科・実科高等女学校（以下両者を合わせて「実科高女」と総称する。）で使用された文部省検定教科書の一つであった吉田良三著『女子簿記教科書』（修正再版）（1936年、以下「本書」とする。）の分析・検証を通して、SDGs目標4「質の高い教育」と特にジェンダーの視点から、当時の女性の会計学教育の状況を探ることを目的とする。研究方法としては、本書を現代語訳²し、検証、他書との比較を適宜行うことにより、上記の課題について考察する。次節では、先行研究について述べ、第3節では、当時、高等女学校で使用された他の女性学習者向け簿記教科書との比較し、第4節では、同著者による同時期の男性学習者向け文部省検定簿記教科書であった『中等簿記教科書』（1934）との内容を比較する。

本書は、東京商科大学名誉教授・商学博士である吉田良三（1878-1944）が実科高女向けに執筆した簿記教科書であり、昭和10年（1935年）10月2日に初版が発行され、その数か月後の昭和11年（1936年）2月12日に「修正再版」が発行され、後者は昭和11年2月13日付文部省検定済と記載されている。また、本書は単式簿記および複式簿記の入門教科書であるだけでなく、「附録として巻末に附せる『家計簿の付け方』は、家事科と多少重複する部分があっても、成るべく完全に教授することを望む。一般簿記を履修した上でこれを学べば、家計簿記を極めて完全に理解し、適切に実地応用する素養を身につけることができる」（同書「はじめに」）とされている。

吉田良三は日本の近代簿記会計（特に原価計算）の開拓者であり、岡本（1986a, 494）は「一橋における原価計算・管理会計の歩み」において、「吉田良三博士は明治11年に高知市に生まれ、明治36年に東京高商専攻部領事科を卒業し、早稲田大学に奉職、大正3年9月から1年半英米に留学した。東京高商が大学に昇格する際、会計学関連の科目を増強する必要が生じ、そのため吉田博士は早稲田大学から母校に招かれ、東京高商教授に就任した。大正7年9月のことである。それ以来、昭和13年に退官するまでの20年間、原価計算の講義を担当し、多数の著書を執筆した」と述べている。

¹ 詳細は、同協会の前文（https://jcpa.or.jp/cpainfo/introduction/cpa_women/news/files/0-99-0-1-20181214_1.pdf as of 2024/09/12）および女性会計士活躍の更なる促進のためのKPI設定の提案について（https://jcpa.or.jp/cpainfo/introduction/cpa_women/news/files/0-99-0-2-20181214_1.pdf as of 2024/09/12）を参照されたい。

² 小泉（2024a）

2. 先行研究

戦前の女性教育に関する研究は、歴史学、教育学、ジェンダー学の観点から多岐にわたり展開されており、橋本(1992)、橋本・逸見(2003)、小山(1991,2015,2022)などの先行研究がその代表例である。また、教育史学会が1995年に開催した第38回大会では、「教育史における女性：ジェンダーの視点から教育史を問い直す」というテーマで活発な議論が展開され、その議論の内容は橋本(1995)や小山(1995)の大会記録に記されている。しかしながら、これらの研究の中で簿記教育に焦点を当てたものは確認されていない。さらに、小山(2023)は高等女学校をテーマにその歴史的背景と分析を包括的に整理・紹介しているが、実科高女での簿記教育に関する記述は見当たらない。また、小山(2015)では、生理衛生教科書、音楽教育、少年少女の投書文化、スポーツにおけるジェンダー比較が詳細に考察されているが、簿記教育への言及はない。

家計簿については既に幾多の研究がなされており、近年の例として、篠藤(2020)は明治初期の日本女子の家計管理について文部省による翻訳教科書を通じて、英国女子の会計役割とその目的に強い影響を受けた事実に着目した研究であるが、商業簿記に関する取り扱いは限定的である。³

一方、戦前の会計学教育全般に関しては多くの研究がなされており、例えば、日本公認会計士協会(2019)の「我が国における会計基礎教育の歴史」は、工藤による第2章第1節「会計教育の開花と展開－明治時代－」および島本(2019)による第2章第2節「会計教育の定着－大正時代から昭和時代－」において明治以降の会計学教育の歴史が詳細に記述されており、会計教育の発展が体系的に整理されている。また、工藤・柴(2022)は、商業教育制度の発展過程を、教育課程および教育方法との相関関係を通じて明らかにしている。

また、会計学領域における吉田の功績については多くの会計史研究によって詳細に紹介されてきた。例えば、工藤(2015)は、吉田の指導を受けた阿久津桂一の所蔵書籍である阿久津文庫を分析し、日本の会計学がどのように発展し、近代化していったかを探求している。その中で、吉田が1910年に著した『会計学』が日本における会計学研究の転換点となったと評価しており、この著作がアメリカの会計学者ハットフィールドの『Modern Accounting』(1909)に依拠しつつも、日本における会計学の基盤を築いたことを指摘している。友岡(2018)は、明治時代における洋式簿記ないしそれを含む会計教育の展開を、主として文献および教育機関に注視し辿る中で、下野直太郎の『簿記精理』を日本初の独自の簿記文献として評価するとともに、吉田の業績を評価している。その中では、岡田誠一、太田哲三、黒澤清など、著名な会計学者たちが吉田の貢献を記しており、例えば、岡田は、「堂々会計学と名乗って斯界の先頭を切った吉田博士の功労には匹敵すべくもない」、太田は、「何と云っても吉田教授の『会計学』は穩健中正である。殊に英米の諸学説を適当に按配した啓蒙の書として、今から見れば物足りないところも無いではないが、当時として優れたものであった。」、黒澤は、「明治簿記時代が終焉を告げ、大正時代を経て昭和初期の時代に入る過渡期においては、穩健で常識的な吉田良三の

³同研究に続いて、明治時代に東京で初めて政府から独立した私立の女子商業学校が設立された背景とその目的に着目した研究が進行中との報があるが、そこで取り扱われている時代区分は本研究の昭和前期よりも前のようである。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-22K01789/> as of 2024/09/12 as of 2024/09/12, 篠藤(2024) 参照。

会計学が、日本会計学の伝統形成に多くの貢献をもたらしたのであった。」と述べている。また、原（2018）は、吉田の複式簿記教授法を検討し、日本の簿記教育における伝統的手法との関連を分析している。また、工藤（2019）と島本（2019）は明治、大正、昭和初期の簿記教育において吉田が指導的立場にあったことを詳細に記している。だが、幾多の吉田研究の中で本書、あるいは女性を対象とした簿記教育に関する研究は見当たらない。

すなわち、ジェンダー学を含む教育史の領域において、高等女学校や実科高女に焦点を当てた研究は存在するものの、簿記教育に関しては十分に取り上げられておらず、また、女性と家計簿に関する研究は多数あるが、それらは商業簿記にはほとんど触れていない。他方、会計史の領域においては、日本における複式簿記の導入や戦前の簿記教育に関する研究が豊富に存在するものの、ジェンダーの観点からこれらの問題を分析した研究は見受けられない。さらに、吉田良三の業績に関する研究は多く行われているものの、本書に関連した研究は確認されていない。したがって、本研究は、昭和前期における実科高女での簿記教育をジェンダーの視点から分析するという点で、先行研究では未だ取り組まれていない重要な課題を提示している可能性が高い。

3. 高等女学校における簿記・会計学教育の状況：他の女性学習者向け簿記教科書との比較

本節では、教育学領域で重要視される比較の手法段を用い（岡田 2015, 11, 40）、本書と同時期に実科高女で使用された他の女性学習者向け簿記教科書と対比することにより、昭和前期の実科高女における簿記・会計学教育の状況を簡潔に述べる⁴。

鳥居（1967）による『教育文献総合目録第三集 明治以降教科書総合目録』では、女学校および高等女学校で使用されていた教科書として、本書（初版および修正再版）に加え、『実践女子簿記教科書』（小野澤 1936）、『女子簿記教科書』（初版および訂正再版）（渡部 1936）が挙げられている。また、鳥居（1967）には記載されていないが、『女子簿記教科書』（吉川 1936）の写本も入手できており、これを含めたものが図表 3.1 である。さらに、『女子簿記新教科書』（森・折本・繁田 1935）および『女子簿記新教科書』（松本 1938）も存在していたとされるが、これらの内容については確認できていない。

しかし、本書を含む多くの女子簿記教科書がこの時期に発行されていたことが明らかである。なお、本書以外の教科書が文部省の検定を受けたものであるか、高等女学校向けに執筆されたか、またその利用状況や累計発行部数については現時点では不明であり、今後の課題である。

⁴ 当時の高等女学校における簿記・会計教育の状況の詳細は、小泉（2024c）参照。

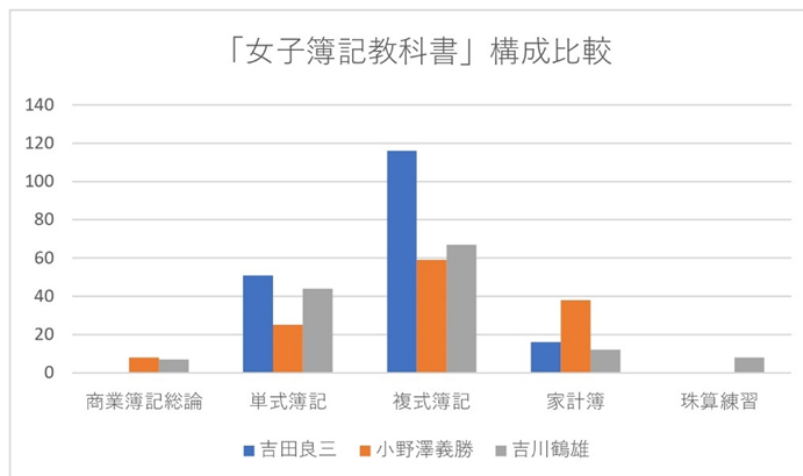
図表 3.1 昭和前期の女性の学習者向け簿記教科書

発行年	著者	書名	発行者
1935年10月	吉田良三	女子簿記教科書（初版）	同文館
1936年2月	吉田良三	女子簿記教科書（修正再版）	同文館
1936年2月	小野澤義勝	実践女子簿記教科書	大成書院
1936年8月	吉川鶴雄	女子簿記教科書	帝国書院
1936年12月	渡部明	女子簿記教科書（初版）	三陽閣
1936年12月	渡部明	女子簿記教科書（訂正再版）	三陽閣

出所：鳥居（1967）をもとに作成

次の図表 3.2 は、本書と同時期に出版された女子簿記教科書である小野澤（1936）および吉川（1936）の教科書構成を項目毎のページ数でもって比較したものである。比較項目としては、商業簿記論、単式簿記、複式簿記、家計簿、および珠算練習が含まれている。この比較により、本書が複式簿記に重点を置いているのに対し、小野澤（1936）の教科書は家計簿に焦点を当てていることが明らかである。尚、本書は文部省検定と明記されているが、他の2冊にはその記載がなく、このため文部省検定教科書であったかどうかは不明である。

図表 3.2 吉田（1936）と同時期の他の女子簿記教科書の比較



出所：筆者作成

4. 女性学習者向けの本書と男性学習者向け『中等簿記教科書』のジェンダーの観点からの比較

本節では、まず分析対象である本書の外観と「はしがき」を検討し、続いて当時の男性学習者向け教科書『中等簿記教科書』（吉田 1934）と比較し、学習項目および教科書に掲載されている画像と記述を用いて、教育とジェンダーの視点から本書との比較分析を行う。

4.1 本書の外観・「はしがき」および『中等簿記教科書』との比較

図表 4.1 は広島大学図書館所蔵の資料から抜粋した本書の表紙であり、左側に外表紙、中央に内表紙、右側に奥付の拡大図が示されている。奥付には昭和 11 年 2 月に「修正再版発行」と記載されており、その時点で吉田良三は東京商科大学の教授であった。しかし、外表紙には吉田の肩書が「東京商科大学名誉教授」と記載されている。吉田が名誉教授となったのは 1938 年（昭和 13 年）であり、時代考証的には若干の不整合が見られるが、本教科書は毎年継続して提供されていたため、名誉教授就任後は内容をそのままにし、外表紙の肩書のみを名誉教授に変更して印刷されていたものと推察される。

本書の外表紙は赤、緑、黒の三色刷りで、花と葉をモチーフにした色鮮やかなデザインが施されており、内表紙は茶色と青の二色刷りで、蔦の模様が使われ、いずれも植物のやわらかさが特徴的である。このデザインが誰によるものかの記載は本書にはないが、当時のジェンダー観に沿って女性学習者の関心を引きつけようとする意図が働いていた可能性が考えられる。

図表 4.1 本書の実物写真



出所：広島大学図書館所蔵資料

一方、図表 4.2 は、広島大学図書館所蔵の資料から抜粋した男性学習者向けの『中等簿記教科書』の表紙であり、左側に外表紙、中央に内表紙、右側に奥付が示されている。女性学習者向けの本書と比較すると、『中等簿記教科書』の表紙は黒と薄い緑色で、幾何学的な四角や記号等の無機質とも言えるデザインが特徴的である。

図表 4.2 吉田（1934）『中等簿記教科書』の実物写真



出所：広島大学図書館所蔵資料

これらの違いが著者の吉田の意向によるものであったかどうかは定かではないが、学習者が毎日のように手に取る教科書という特性に鑑みるに、関係者（著者・出版社、あるいは検閲した文部省）が抱いていた学習者層の違いについての認識やジェンダー観を反映し、本書については女性学習者に親しみやすさを感じさせようとする意図が働いていた可能性が考えられる。

続いて、本書（修正再販）の「はしがき」について考察する。冒頭の「はしがき」には、次のように記載されている。（下線による強調は筆者による。）

はしがき1

「本書は高等女学校又は実科高等女学校に於いて、短期間に簿記の大意を教授する教科書用として、一学年間、毎週二時間の授業を標準に編集したものである。」

はしがき2

「内容は、大体中等簿記教科書のそれに準じ、ただ其程度を幾分低めたのに過ぎないが、叙述の方法に就ては、普通の簿記書に見る如き形式を履まず、先ず現金出納帳を始めとし、其他個々の帳簿につき、其付け方・締切法等を練習せしめて、一応記帳に親した上、漸次帳簿の組織・取引記帳関係・決算等に説明を進展せしめ、其間適當の箇所に、簿記の基礎概念をなす財産・資本・損益・取引等に関する解説を挿入することとし、以て初学者に簿記を難解なりとの感を抱かしめない様、努めて入り易く親み易く説きたるを特色とする。」

まず、「はしがき 1」では、本教科を一学年間、毎週二時間の授業で学習することは、本書の難易度を考慮すると相当な困難を伴ったのではないかと推測される。この点については、『中等簿記教科書』との比較を後述する。「はしがき 2」では、本書が『中等簿記教科書』を基にし、理解を促進するために構成に工夫を施していると記されている。しかし、ここには女性学習者に異なる学習方法を求めた理由について、吉田の見解を示唆する記述は見当たらない。

次項では、この点に着目し、女性学習者向けの本書と男性学習者向けの簿記教科書の内容を比較することで、さらなる考察を行う。

4.2 本書と『中等簿記教科書』の学習項目の比較

図表 4.3 における書籍名の右側の括弧内の数字は、教科書のページ数を示しており、『中等簿記教科書』は 201 ページ、本書は 186 ページである。これには練習問題の紙幅も含まれているが、両者の総分量に大差は見られない。次に、『中等簿記教科書』のはしがきおよび凡例の 2 行目には「四学年に於ては毎週 1 時間、五学年に於ては毎週 2 時間の授業」と記載されている。一方、本書では「一学年間毎週 2 時間」と記載されている。さらに、本書には『中等簿記教科書』にはない「家計簿」の項目が含まれている点が特徴である。これらの違いを考慮すると、授業時間の累計では『中等簿記教科書』が本書に対して 3 対 2 であり、教科書のページ数では 201 ページ対 186 ページとなる。学校教育の現場では基本的に教科書に沿って教えられることを勘案するに、本書による授業はより短時間でなされることから、時間当たりでこなす分量としてはかなりのものであったことであろう。

図表 4.3 『中等簿記教科書』と本書の凡例とはしがきの対比

吉田良三「中等簿記教科書」(201) 昭和8年9月発行、昭和9年1月修正再版発行	吉田良三「女子簿記教科書」(186) 昭和10年10月初版、昭和11年2月修正再版
凡例 1.本書は中等学校用教科書として昭和6年2月改正の文部省中學校教授要目に準拠し、 <u>四学年に於ては毎週1時間五学年に於ては毎週2時間の授業を標準として編纂したものである。</u> 2. <u>教授要目では四学年に単式簿記が、五学年に複式簿記が当てられている。</u> 然し著者の経験では <u>複式簿記は単式簿記に比して四倍以上時間を要するから、若し四学年で単式簿記が早く終わったならば、複式簿記に進入しておくのが至当である。</u> 3.各章の終りに復習問題を付して置いた。これを適当に利用することによって、既習知識を確実にする助けとなし得ること少なくないと思ふ。但、進度の如何により適宜取捨して差支へない。 4.凡そ簿記を初めて学ぶ者には理論を詳説するよりも記帳技術を完全に会得せしむることが肝要である。蓋し <u>記帳技術を会得すれば理論は自ら解って来るからである。</u> 故に本書には実際に即した記帳練習問題を比較的多数収め、而も <u>同種例題を必ず二個設けてある。</u> これ一つの例題は教室で一緒に記録練習せしめ、他の方は成るべく生徒自身をして記帳せしめ、これを検閲添削して注意を与える様になることが、経験上短時間に簿記を会得せしむる有効の手段と信じたからである。 昭和8年8月	はしがき 1.本書は高等女学校又は実科高等女学校に於て、短期間に簿記の大意を教授する教科書用として、 <u>一学年間毎週二時間の授業を標準に編纂したものである。</u> 2.内容は、 <u>大体中等簿記教科書のそれに準じ、ただ其程度を幾分低めたのに過ぎないが、叙述の方法に就ては、普通の簿記書に見る如き形式を履まず、先ず現金出納帳を始めとし、其他個々の帳簿につき、其付け方・締切法等を練習せしめて、一応記帳に親ました上、漸次帳簿の組織・取引記帳関係・決算等に説明を進ませしめ、其間適當の箇所、簿記の基礎概念をなす財産・資本・損益・取引等に関する解説を挿入することとし、以て初学者に簿記を難解なりとの感を抱かしめない様、努めて入り易く親み易く説きたるを特色とする。</u> 3.全篇を通し説明は平易明瞭を旨とし、全く商業知識のなき初学者と雖も、一読容易に其意味を理解し得る様にした。斯で、 <u>説明のために要する時間を節約し、主力を記帳練習に注がしめることを企図した。</u> 蓋し、簿記の初学者には、 <u>先ず記帳技術を会得せしめることが肝要であつて、これを完全に修得すれば、理論は自ら解って来るからである。</u> 記帳練習問題を比較的多数収め、而も出来るだけ変化に富ましめた理由もここにある。 4.各章の終りに復習問題を付しておいたから、これを適当に利用すれば、既習知識を確実にする助となし得る所少なくないと思ふ。但、授業時数や進度関係如何に因つては、適宜取捨するも差支えない。 5.附録として巻末に附せる「 <u>家計簿の附け方</u> 」は、家事科と多少重複する様なことがあつても、 <u>成るべく完全に教授することを望む。</u> 蓋し、一般簿記を履修した上これを学べば、家計簿記を極めて完全に理解し、これを適切に実地応用する素養をつくり得るからである。 昭和10年8月

出所：左側は吉田（1934）の「凡例」、右側は、本書の「はしがき」をもとに作成。（太字・下線による強調は筆者による。）

次の図表 4.4 は、本書と『中等簿記教科書』の各目次を示しており、この中の各編および各章の右側の括弧内の数字は教科書の頁数を表している。

図表 4.4 『中等簿記教科書』と本書の目次の比較

第一編 総論 (10)	第一編 単式簿記 (51)
第一章 総説 (2)	第一章 序説 (1)
第二章 財産及び資本 (2)	第二章 現金出納帳 (7)
第三章 損益 (2)	第三章 仕入帳 (4)
第四章 取引 (2)	第四章 売上帳 (7)
第五章 帳簿 (9)	第五章 日記帳及元帳 (7)
第二編 単式簿記 (29)	第六章 取引と其記入帳簿 (4)
第一章 帳簿及記帳法 (5)	第七章 決算 (9)
第二章 例題記帳 (10)	第八章 記帳練習例題 (12)
第三章 決算 (6)	第二編 複式簿記 (119)
第四章 記帳練習例題 (8)	第一章 総説 (3)
第三編 複式簿記 (141)	第二章 仕訳 (7)
第一章 総説 (1)	第三章 勘定科目 (20)
第二章 取引の分解 (4)	第四章 帳簿 (19)
第三章 勘定及勘定口座 (3)	Ⅰ. 主要簿
第四章 仕訳 (3)	Ⅱ. 補助簿
第五章 勘定科目 (其の一) (18)	第五章 決算 (17)
Ⅰ. 財産勘定	第六章 記帳練習例題 (9)
Ⅱ. 資本勘定	第七章 手形取引 (13)
第六章 帳簿 (4)	第八章 商品勘定の分割 (16)
Ⅰ. 主要帳簿 (2)	第九章 記帳練習例題 (9)
Ⅱ. 補助帳簿 (2)	第十章 伝票 (6)
第七章 記帳例示 (11)	第十一章 特殊現金出納帳 (6)
第八章 決算 (17)	第十二章 単式簿記と複式簿記 (6)
第九章 記帳練習例題 (8)	付 録 家計簿の付け方 (16)
第十章 単複両式の比較及び転換手続 (3)	1 総 説
第十一章 手形 (10)	2 勘定科目
第十二章 委託売買 (11)	3 帳簿の種類
第十三章 勘定科目 (其二) (18)	4 決 算
第十四章 記帳練習問題 (14)	5 記帳例示
第四編 帳簿 (17)	
第五編 会社会計 (7)	
記帳練習問題 (12)	

出所：左側は吉田（1934），右側は本書および小泉（2024a, 14-17）をもとに作成

『中等簿記教科書』の第1編（総論）の第2章（財産及び資本），第3章（損益），第4章（取引）に記載された語句は本書の目次には直接的には含まれていないが，これは本書で割愛されたのではなく，「はしがき 2」に記載されている通り，まず現金出納帳から始め，その他の個々の帳簿の付け方や締切法等を練習させることにより，一通り記帳に親しんだ後，徐々に帳簿の組織，取引記帳の関係，決算等に進展させるという構成の工夫がここに見られる。その後の内容については，

単式簿記から複式簿記へと進むステップは両方に共通している。「はしがき 1」によれば、『中等簿記教科書』では最初の 1 年間で単式簿記に費やし、2 年目に複式簿記を学ぶという学習項目であるが、本書では単式簿記と複式簿記の両方を 1 年で学ぶ構成となっている。この点について、『中等簿記教科書』の凡例 2 には「著者の経験では複式簿記は単式簿記に比して四倍以上の時間を要する」と記載されており、本書の複式簿記の内容が『中等簿記教科書』とほぼ同等の水準にあることから、吉田が当時の女性学習者も男性学習者と同等に簿記を理解する能力があると考えていたことがわかる。

本書においては、『中等簿記教科書』の第 3 編（複式簿記）の第 12 章「委託売買」および第 5 編「会社会計」に相当する内容が含まれておらず、これらの章は吉田により割愛されたと考えられる。これは、授業時間が 3 対 2 という制約の中で、『中等簿記教科書』のいくつかの内容を削減する必要があったためであろう。一方で、『中等簿記教科書』にはない本書独自の項目として第 2 編（複式簿記）に第 10 章「伝票」が追加されている。この「伝票」については後述する。

4.3 教科書に掲載されている画像の比較

(1) 本書のみに掲載されている画像

西洋式の複式簿記は、福澤諭吉によって日本に紹介されたとされ、具体的には、福澤がアメリカで広く使用されていた民間簿記学校の教材を、知人を通じて入手し、日本で長らく用いられていた『大福帳』などの単式簿記とは異なる会計システムであることを認識したうえで、この翻訳書を出版したとされる。当時「簿記」という用語は日本に存在せず「帳簿合わせ」という意味で用いられていた「帳合」という用語を用いて『帳合之法』として発行されたとされる⁵。この史実についての『中等簿記教科書』と本書の記載を対比したのが図表 4.5 である。

図表 4.5 『帳合之法』に関する説明書きの比較

<p>Pacioli) が 1494 年に出版したものである。我國では明治 6 年福澤諭吉氏の譯著帳合の法によつて初めて洋式の簿記が紹介せられ、爾來産業の發達と共に今日の進歩普及を見るに至つた。</p>	<p>、福澤諭吉氏譯「帳合之法」は初編二冊・二編二冊合計四冊より成る。(巻頭挿繪参照) 原著者は米國の Bryant & Stratton 兩氏。原書名を Common School Book-keeping と云ふ。初編は明治六年六月の刊行にかゝり、二編は翌七年六月刊行された。前者は略式即ち單式簿記を、後者は本式即ち複式簿記を説明する。今の東京商大の前身と云はれる當時の商法講習所その他我國の最も早い商業學校等に教科書として採用されたものである。</p>
---	---

出所：左側は吉田（1934, 41），右側は、本書巻頭および小泉（2024a, 8）

⁵ 福澤の『帳合之法』に関する研究に関しては、多くの研究者の論文が存在し、近年では『福澤諭吉年鑑』第 50 巻の「特集『帳合之法』刊行 150 周年」に詳細に記されている。

『中等簿記教科書』(p41)には、「我が国では明治6年に福澤諭吉氏の訳著『帳合之法』によって初めて西洋式の簿記が紹介され、以後産業の発達とともに今日の進歩普及を見るに至った」と、わずか3行で記載されている。

他方、本書の発刊は『中等簿記教科書』の2年後であるが、図表4.5の右側の説明に加え、図表4.6に示されるように、写真二枚を添えて『帳合之法』と福澤諭吉に関する説明がなされている。そこには、「福澤諭吉氏訳『帳合之法』は、初編二冊・二編二冊合計四冊より成る。(巻頭挿絵参照)原著者は米国のBryant & Stratton両氏。原書名をCommon School Book-keepingと云う。初編は明治六年六月の刊行にかかり二編は翌七年六月刊行された。前者は略式即ち単式簿記を、後者は本式即ち複式簿記を説明する。」(小泉2024a, 9)と記されている。

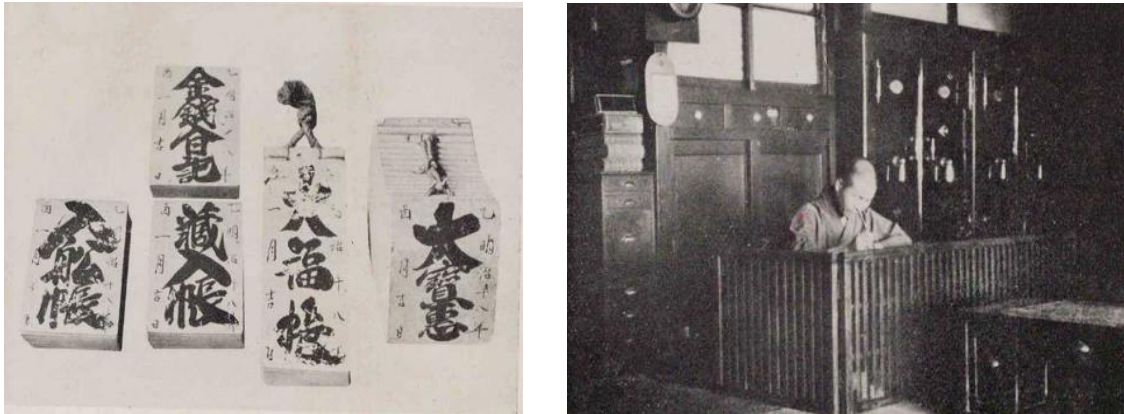
図表4.6 本書のみの画像①



出所：本書巻頭挿絵および小泉(2024a, 7)

以上から、本書は、冒頭において丁寧な説明を行うだけでなく、写真などの視覚的要素を積極的に取り入れることで、女性学習者の理解を促進する意図があると考えられる。また、福澤諭吉およびその著書『帳合之法』を紹介することで、著者が本書の学習者に対して強い啓蒙の意図を持っていたことが窺える。本書は、当時の女性学習者に対する会計学教育の重要性を強調し、その普及に努めた意欲的な取り組みとして位置付けられる。

図表 4.7 本書のみの画像②



出所：本書 100 頁挿絵および小泉（2024a, 211）

図表 4.7 の左側は、日本で江戸時代から使用されていた『大福帳』等の単式簿記を紹介するものであり、この写真は本書にのみ掲載されているものである。本書（1936,100）では、「諸帳簿は我が国在来の帳合法の下における簡単な帳簿組織の一例である。大宝恵はオボエ（覚）であって、取引記録の覚書をする帳簿である。本文の日記帳に当たり、当座帳とも呼んだ。これに付込んでおき大福帳（大帳）すなわち元帳に転記する。金銭入日記（又金銭出入帳とも称した）は金銭の出納を記録し、蔵入帳は商品の出納を記入する帳簿である。入船帳は船が着いたとき、荷主名、品名、数量等を記入するものである。尚これ等の他に、売上帳に当たるものは仕切帳又は売帳と呼ばれ、仕入帳に当たるものは仕入帳または買帳と呼ばれ、一般に広く用いられていた」（小泉, 2024a, 213）と説明されている。

図表 4.7 の右側には、番頭と思われる人物の写真が掲載されている。当時の社会情勢を反映して、女性の番頭の写真は見つからなかった可能性がある。この箇所について本書では、次のように述べている（本書, 100 頁挿絵; 小泉, 2024a, 213）。

「老舗に於ける帳場の様子である。金庫等近代的な調度品があるに拘らず、我国古来の事務室の面影を思い浮かべることが出来よう。殊に次頁の挿絵と比較するならば、帳簿組織と事務組織との異常なる変遷の跡を辿り得て一層興味が深い。」

以上を踏まえると、本書の対象である実科高女で学ぶ女性学習者の多くは、家庭が商業を営んでいた場合を除いて、そもそも簿記会計がどのようなものかを自ら見聞きしたことがある者が、男性学習者よりも少ないであろうことを考慮に入れて、会計事務の現場の様子についてより丁寧に説明がされていると推察される。

(2) 両方で異なる画像

図表 4.8 は職場の状況を示した写真であり、左側の写真は『中等簿記教科書』に「記帳」として掲載されていたもので、被写体は男性のみである。一方、本書に掲載された写真の被写体は女性の

みである。本書ではこの写真に「執務」というタイトルを付け、加えて、女性の机にある書籍が拡大され「帳簿組織の一例」と題して紹介されている（この拡大写真は本稿には掲載していない）。もし吉田がこれらの写真の選択に自ら関与していたならば、本書で同性の執務の写真を載せることにより、女性学習者に親近感をもたらしそうとする意図が働いていた可能性が考えられる。

図表 4.8『中等簿記教科書』と本書で異なる画像 ①



出所：左側の写真 吉田（1934, 巻頭），右側の写真 本書 100 頁挿絵および小泉（2024a, 214）

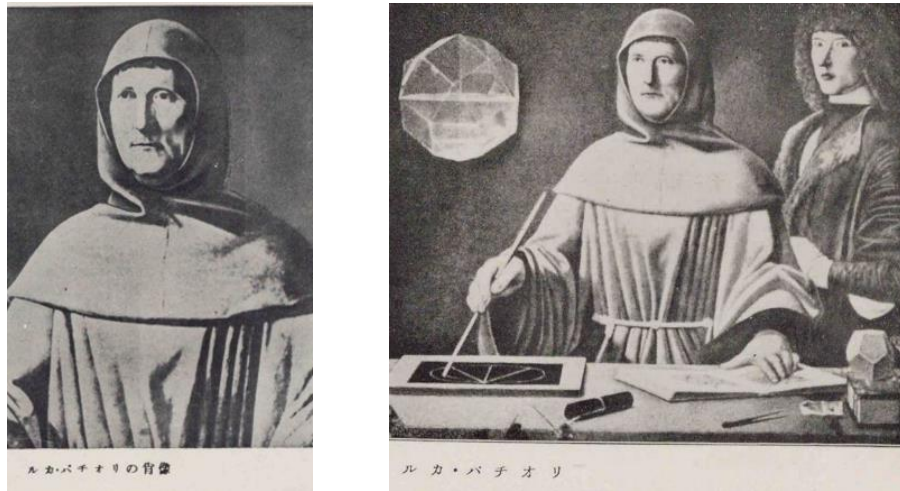
図表 4.9 は、複式簿記の仕組みについての世界最古の記述を残したとされるイタリアの数学者ルカ・パチオリ（*Fra Luca Bartolomeo de Pacioli*）⁶の画像である。同図表左側（『中等簿記教科書』）には、ルカ・パチオリのみが掲載されているが、同図表右側（本書）には、教えを授けている場面が描かれ、パチオリの背後に女性らしき人物が写っている。当初、筆者は、吉田がこの人物を女性と推測して本書に掲載したと考えたが、この画像は、イタリア南部ナポリにある国立カポディモンテ美術館の「ルカ・パチオリ修道士と青年の肖像」（1495 年）と題された肖像画であり、「表面の図は彼が *Summa* を前にして、数学を教えて居る所で、傍らに立って教えを受けているのは、ウルビノ侯（*Duke of Urbino*）であると信じられて居る。」（小泉 2024a, 121）と記されている。佐々木（2016）は、「ルカ・パチョーリが、開かれた本を指さしながら、細長いニードル状の棒で、タブレットに手書きの図形を描き、ユークリッド幾何学について講じている様子が描かれている。」と解説している。

『中等簿記教科書』では顔写真だけであったところ、本書ではパチオリが作業に取り組んでいる様子の全体像を視覚的に紹介している。

⁶ ルカ・パチオリについては吉田（2000）、佐々木（2016）、渡邊（2017a, 2017b）を参照。

なお、ルカ・パチオリは、中世ヴェネチア商人が使用していた複式簿記（ヴェネチア式簿記）を、自著 "*Summa de Arithmetica, Geometria, Proportioni et Proportionalita*"『算術、幾何比及び比例総覧（略称：スムマ）』（1494 年、ヴェネチア刊）で紹介し、同書は現代企業も用いる複式簿記の初めての印刷文献とされる。

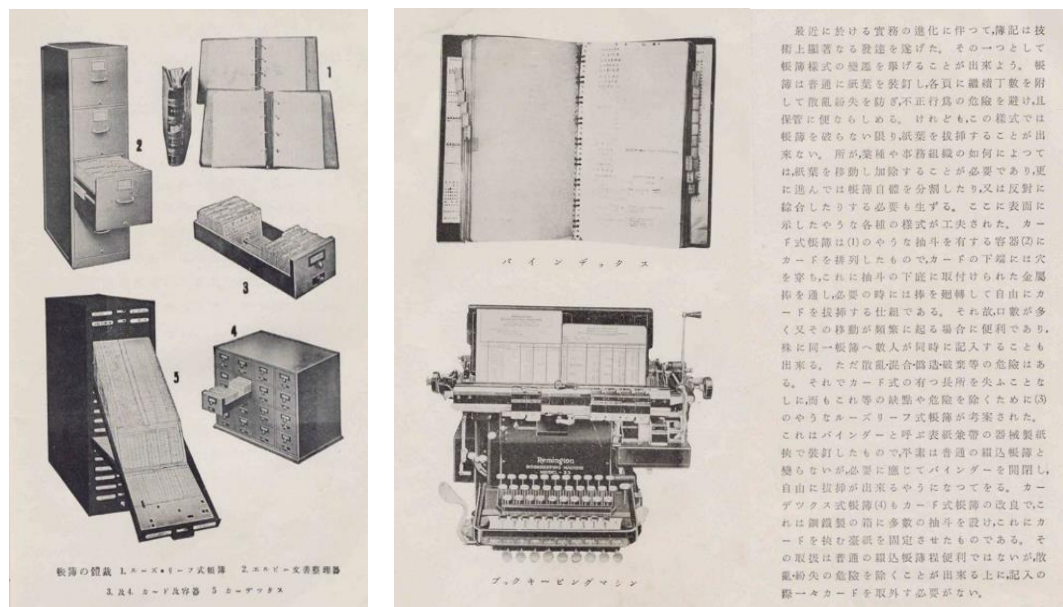
図表 4.9 『中等簿記教科書』と本書で異なる画像 ②



出所：左側の写真 吉田（1934, 40 頁挿絵），右側の写真 本書 52 頁挿絵および小泉（2024a, 118）

図表 4.10 は、学習者に対して、簿記帳簿にはいろいろな形状のものがあることを示した写真である。右側の本書の写真の上のものは、差し込み式で帳簿のページを動かせるバインダー式の「バインディックス」と呼ばれた帳簿で、これは『中等簿記教科書』にもほぼ同じものが掲載されている。しかし、その下のタイプライターのようなものは「ブックキーピングマシン」と呼ばれるものであるが、これは『中等簿記教科書』には見られない。また、本書では詳細な説明文が掲載されている。これらから、本書では、簿記会計の現場に不慣れな女性学習者がイメージしやすいよう、詳細な文字情報に加えて、就職した際に職場で見る可能性が高い簿記用の器具等の紹介についても、写真を用いて丁寧に手を加えられた可能性が考えられる。

図表 4.10 『中等簿記教科書』と本書で異なる画像 ③



出所：左側の写真 吉田（1934, 10 頁挿絵），右側の写真 本書 158 頁挿絵および小泉（2024a, 328, 330）

4.4 項目毎の両者の記述分量・内容の比較

(1) 伝票会計

本書において特筆すべきは、伝票会計に関する記述である。伝票は経理業務のみならず、営業や倉庫の現場でも広く使用される重要なメカニズムであるが、『中等簿記教科書』ではその説明が1頁弱である。一方、本書では伝票会計について6頁にわたり詳細に説明されている。さらに、『中等簿記教科書』には含まれていない伝票のフォーマットについても、本書では具体的な図版付きで説明されており、具体的には、入金伝票、出金伝票、振替伝票、売上伝票、および伝票集計表が取り上げられている。

図表 4.11 入金伝票・出金伝票・振替伝票

The image displays three distinct forms used in Japanese bookkeeping. The first form, '入金伝票' (Deposit Slip), is dated '昭和〇年2月5日' and issued by '田島代店' (Tajima Daiten), recording a deposit of 361.00. The second form, '出金伝票' (Withdrawal Slip), is dated '昭和〇年2月6日' and issued by '市川商店' (Ichikawa Shoten), recording a withdrawal of 500.00. The third form, '振替伝票' (Transfer Slip), is dated '昭和〇年2月10日' and records a transfer of 1,500.00 from '富永商店' (Tomonaga Shoten) to '富永商店' (Tomonaga Shoten) for a '受取手形' (Accepted Bill of Exchange).

出所：本書 155-157 頁および小泉 (2024a, 322-326)

このように、本書は伝票会計の実務における具体的な適用方法を、より実践的かつ視覚的に理解しやすい教材として位置づけられている。これは、当時の女性が伝票処理において重要な役割を担っていたことを反映している可能性が高い。したがって、本書の詳細な伝票会計の記述は、当時の女性の実務における役割を理解する上で重要な資料となり得る。⁷

(2) 手形取引

もう一つ注目すべき点は、本書における手形に関する記載である。本書では「手形取引」「手形の流通」「受取手形勘定」「支払手形勘定」「為替手形の振出」「手形記入帳」「手形の割引」「荷付為替手形」「荷為替の処理法」「不渡手形」の10項目にわたって詳細に解説している。この内容は『中等簿記教科書』でもほぼ同様に扱われているが、本書では13頁にわたり記述されているのに対し、『中等簿記教科書』では10頁に簡略化されている。これは、本書が初学者、特に女性学習者に対して、会計実務で頻繁に遭遇する手形に関する知識をより丁寧に伝えようとしていることを示唆している。

⁷ 伝票に関して、1929年（昭和4年）に日本女子大学の一部であった「女子大学講義発行所」が出した『職業別学校案内と婦人職業指導』は、「普通女事務員」についての箇所では「現今全国に約五万以上の婦人事務員があって、小は中流処の商店から、大は官省に至るまで、必ず多数の婦人事務員の働いて居る勇ましい姿を見出すのであります」とした上で、その仕事内容について「仕事は概して簡単で、計算、カード取扱、帳簿カードの記入、伝票の整理、調査、通信、会計、筆耕、記録等でありまして」と記している。（女子大学講義発行所 1929, 203）（下線による強調は筆者による）。

(3) 演習例題

本書における演習例題の質と量は、特筆すべき特徴の一つである。単式簿記を扱う第一編の最後に第8章として第一例題と第二例題が、複式簿記を扱う第二編の最後に第9章として第三例題が設けられている。この構成は『中等簿記教科書』とほぼ同一である。図表4.12は両教科書の対比表であり、数値は該当する頁数を示している。本書と『中等簿記教科書』の本体部分の詳細な比較には物理的制約があるが、同一著者による共通の章立てを持つ教科書間の比較を行うことで、各教科書の特徴が明確に浮かび上がると考えられる。

図表4.12 本書と『中等簿記教科書』の演習例題比較

	『中等簿記教科書』			本 書		
単式簿記	第二編 第4章 第一例題 (pp32-35)	メリヤス小売業 ・事業開始 ・売買取引(現金・掛け) ・決算(棚卸・減価償却)	4	第一編第8章 第一例題 (pp40-45)	メリヤス小売業 ・事業開始 ・売買取引(現金・掛け) ・決算(棚卸・減価償却)	6
	同, 第二例題 (pp36-39)	白米卸小売業 ・取引形態は上記とほぼ同一	4	同, 第二例題 (pp46-51)	白米卸小売業 ・取引形態は上記とほぼ同一	6
複式簿記				第二編第6章 第一例題 (pp118-121)	砂糖商 ・事業開始 ・売買取引(現金・掛け) ・手形小切手取引 ・決算(棚卸・減価償却・合計試算表)	4
				同, 第二例題 (pp122-126)	砂糖商(第一例題から続く) ・取引形態は上記とほぼ同一	5
	第三編第14章 第一例題 (pp151-157)	衣料品販売業 ・商品勘定分割無しの教示 ・手形振出 ・荷為替取組 ・手形割引 ・手形裏書 ・受託買付 ・販売委託 ・手形不渡り無し ・決算(棚卸・減価償却)	7	第二編第9章 第三例題 (pp146-152)	衣料品販売業 ・商品勘定三分割の教示 ・手形振出 ・荷為替取組 ・手形割引 ・手形裏書 ・受託買付無し ・販売委託無し ・手形不渡り無し ・決算(棚卸・減価償却)	7
	第三編第14章 第二例題 (pp158-164)	小麦粉販売業 (第一例題の取引形態に加えて) ・小口現金出納帳・積送品記入帳を使用 ・商品勘定三分割の教示 ・決算・支払保険料の期間按分(直接法教示)	7			
頁計			22			28
会社会計	第五編 記帳 練習例題 第一例題 (pp189-194)		6			
	第二例題 (pp195-201)		7			
頁数合計			35			28

出所：左側は吉田（1934）から、右側は本書および小泉（2024a）をもとに作成

まず単式簿記の編において、その第一例題では、両教科書とも、事業開始、売買取引（現金・掛け）、決算（棚卸・減価償却）をメリヤス小売業（衣料品販売業）を例にして、6月1日に事業を開始し、月内に様々な取引が発生した後、同月末に決算を行う構成となっており、最終的には「決算表」が作成され、図表 4.13 は本書の第一例題の「決算表」の写しである。

図表 4.13 本書の「第一例題」の最後に掲げられた「決算表」

決 算 表			
昭和〇年6月30日			
現 金	147 00	買 掛 金	514 50
小 賣 掛 金	23 40	元入資本金	1,000 00
商 品	785 00		
敷 金	360 00		
什 器	185 00		
当期純損失	14 10		
	1,514 50		1,514 50

(注意) 第一例題につき商品賣買損益を計算せよ。

出所：本書 45 頁および小泉 (2024a, 102)

この「決算表」について吉田は教科書の該当箇所において「決算表とは、決算日の財産状態を明かにし、尚、それによって営業成績を示す利益金を算出する表のことである。表の様式は、左右に欄に分かたれ、一方に資産を他方に負債を掲げ、双方の各合計額を比較して、その差額を金額の小さい方に、現在資本金として記入し、以て双方の合計を相平均せしめたものである。」と記している（本書 35 頁および小泉 2024a, 83）。本書の第一例題は『中等簿記教科書』の第一例題とその内容において質的にはほぼ同一であり、これは図表 4.14 の『中等簿記教科書』の第一例題の最後に掲げられた「決算表」を図表 4.13 の本書の例題と対比により示される。

図表 4.14 『中等簿記教科書』の「第一例題」の最後に掲げられた「決算表」

決 算 表				
昭和〇年6月30日				
現 金	211 90	買 掛 金	487 00	
小 賣 掛 金	18 00	元 入 資 本 金	1,000 00	
商 品	755 50	當 期 利 益 金	48 40	
敷 金	360 00			
什 器	190 00			
	1,535 40			1,535 40

出所：吉田（1934, 33）

他方、本書の第一例題の最後には「（注意）第一例題につき商品売買損益を計算せよ。」との記載があり、これは教科書の以下の記述に呼応する（本書 37 頁および小泉 2024a, 87）。『中等簿記教科書』の第一例題にはこの教示は見当たらない。

30. 商品売買損益の計算法 売買業の損益中、重なるものは商品売買損益である。それ故、これを知ること
は極めて肝要である。商品の販売利益は、売上高からその売上原価を差引いたものである。然るに売上品
の原価は、当期の仕入高（若し前期からの繰越があれば、これを加える）から、期末の買残高を差引いたも
のであるから、次のようにして計算される。

$$\begin{array}{l} \text{純売上高} - (\text{純仕入高} + \text{期首在高} - \text{期末在高}) = \text{売上利益} \\ (\text{売上帳}) \quad (\text{仕入帳}) \quad (\text{前期棚卸表}) \quad (\text{当期棚卸表}) \end{array}$$

第二例題は、本書と『中等簿記教科書』共に、「白米卸小売商」を舞台にしているが、そこで例示される取引形態、例題演習遂行に関する教示について、両者の差異はほぼない。この点、吉田は本書の「はしがき 2」において「2. 内容は、大体中等簿記教科書のそれに準じ、ただ其程度を幾分低めたのに過ぎない」としているが、単式簿記の練習問題を見るかぎり、本書の水準が質的に『中等簿記教科書』を下回ってはいない。他方、演習問題の量については、図表 4.12 例題比較にあるように、単式簿記においては、本書は二つの例題で 12 ページを充て、『中等簿記教科書』の 8 ページを大幅に上回っている。この点、吉田は本書の「はしがき」にて以下のように述べており（小泉 2024a, 11）、この記帳練習重視の姿勢は、本書の単式簿記の編の例題演習において明らかに示されている。

3. 全篇を通し説明は平易明瞭を旨とし、全く商業知識のなき初学者と雖も、一読容易に其意味を理解し得る様にした。斯て、説明のために要する時間を節約し、主力を記帳練習に注がしめることを企図した。蓋し、簿記の初学者には、先ず記帳技術を会得せしめることが肝要であって、これを完全に修得すれば、理論は自ら解ってくるからである。記帳練習例題を比較的多数収め、而も出来るだけ変化に富ませた理由もここにある。（下線による強調は筆者による。）

一方、複式簿記の例題について、本書の第三例題と『中等簿記教科書』の第一例題を比較すると、後者には受託買付記入帳を使用する取引が一部含まれている点を除き、両者はほぼ同一である。この点を示すために、本書の第三例題から抜粋した一部を図表 4.15 に引用している。

図表 4.15 本書の例題の一部

30 日 木村商会へ買掛金の内払として小切手 ¥2,000.00 及び本日付・来月 10 日満期の約束手形 ¥1,200.00 を振出し交付す、支払い場所第一銀行。				
31 日 本日決算を行う。棚卸次の通り。				
(商 品)	三巾金巾 (足利)	100 反	@ ¥ 5.50	¥ 550.00
	綿ネル (初陣)	100 "	@ " 2.00	" 200.00
(什 器)	帳簿価額に対し 5% の減価を見積り償却す。			

出所：本書 151，小泉（2024a, 315）

他方，これに近似するものが『中等簿記教科書』の複式簿記の第一例題（図表 4.16）に存在する。本書の例題には，前払費用の繰延べ処理の決算仕訳が含まれていないことを除けば，両者はほぼ同一水準と言えよう。

図表 4.16 『中等簿記教科書』の例題の一部

22 日 東洋製菓所へ次の通り売り渡す。				
北海片栗粉 (受託品)	250 袋	@ ¥ 8.60		¥ 2,150.00
竹印小麦粉	300 袋	@ ¥ 3.75	"	1,125.00
此の代金の内 ¥2,500.00 は本日付・来月 15 日満期約束手形 #15 にて、残額は小切手にて受け取る。右小切手は直ちに預金とす。				
31 日 本日決算を行う。整理事項次の通り。				
1. 売残商品				
竹印小麦粉	200 袋	@ ¥ 3.50		¥ 700.00
銀杏印	55 "	@ " 4.15	"	228.25
2. 減価償却				
什器に対し帳簿価額の 2%				
建物に対し " " 年 5%				
3. 支払保険料の内 11 か月分 ¥31.89 を次期負担分として控除す。*				
4. 使用残薪炭 ¥15.00 と見積る。(営業費) *				
(註) 3. 4. 何れも直接法によること。				

出所：吉田（1934, 161-163）

また，各例題の成果物となるのが本書では「決算一覧表」（図表 4.17），『中等簿記教科書』では「精算表」（図表 4.18）として示されているが，これらからも両者の間に大きな差はないことが示される⁸。

本書では，複式簿記の三つの記帳練習例題が段階的⁹に配置されており，その最終例題（第三例題）が本書全体の到達目標となっている。この点において，『中等簿記教科書』では，同一内容の例題が最初に提示され，次に続く第二例題で複式簿記の演習が終了する。第二例題は，

⁸ この「決算一覧表」あるいは「精算表」は、試算表、棚卸表、損益計算書、貸借対照表を一括表示したものである。

⁹ 図表 4.12 の本書欄複式簿記の「第一例題」（本書，118），「第二例題」（本書，122），「第三例題」（本書，146）を指す。

第一例題の延長であり、使用する帳簿組織の中に補助簿としての積送品記入帳が含まれ、また「注1：商品勘定を仕入・売上及商品棚卸に分割すること」という指示があるが、第一例題から第二例題にかけてその難易度に大きな差はない。『中等簿記教科書』では、類似した例題を繰り返すことで簿記の技術を習得させ、その後の会社会計の演習に進展させる意図が示されている。他方、本書では会社会計を扱わず、複式簿記の理論と実技の習得を最終目標としており、三つの例題を通じて段階的に学習者の理解を深め、簿記技術を習得させることを目的としていることが窺える。なお、本書に特徴的な伝票会計に関する例題は記されていない。

図表 4.17 本書の第三例題決算一覧表

第三例題決算一覧表							
昭和〇年3月31日							
勘定科目	試算表		棚卸表	損益計算書		貸借対照表	
	借方	貸方		借方	貸方	借方	貸方
現金	253 30	227 40				25 90	
當座預金	11,639 42	8,544 68				3,094 74	
受取手形	2,310 00	1,000 00				1,310 00	
賣掛金	8,520 00	6,045 00				2,475 00	
商品棚卸	635 00		750 00	635 00	750 00	750 00	
什器	360 00		342 00	18 00		342 00	
假渡金	50 00	50 00					
支拂手形	5,500 00	6,700 00					1,200 00
買掛金	7,450 00	10,650 00					3,200 00
手附金	100 00	100 00					
假受金	500 00	500 00					
資本金		3,340 00					3,340 00
仕入勘定	10,213 18			10,213 18			
賣上勘定		10,730 00			10,730 00		
運賃	80 90			80 90			
割引料	5 58			5 58			
旅費	41 70			41 70			
家賃	80 00			80 00			
給料	90 00			90 00			
雑費	58 00			58 00			
	47,887 08	47,887 08	1,092 00				
純利益				257 64			257 64
				11,480 00	11,480 00	7,997 64	7,997 64

出所：本書 152 頁および小泉 (2024a, 316)

図表 4.18 『中等簿記教科書』の第一例題の精算表

精 算 表							
勘定科目	試 算 表		欄卸表	損益勘定		貸借対照表	
	借 方	貸 方		借 方	貸 方	借 方	貸 方
現 金	187.00	152.60				34.40	
當座預金	11,684.92	8,420.80				3,264.12	
賣 掛 金	4,110.00	2,165.00				1,945.00	
受取手形	2,310.00	1,000.00				1,310.00	
受託買付	4,411.80	4,175.50				236.30	
商 品	6,585.00	6,220.00	550.00		185.00	550.00	
什 器	360.00		342.00	18.00		342.00	
假 渡 金	50.00	50.00					
買 掛 金	7,450.00	10,650.00					3,200.00
支拂手形	5,500.00	6,700.00					1,200.00
資 本 金		3,220.00					3,220.00
割 引 料	5.58			5.58			
雑 費	54.00	13.90		40.10			
手 数 料	1.50	105.00			103.50		
旅 費	38.00			38.00			
家 賃	70.00			70.00			
給 料	55.00			55.00			
	42,872.80	42,872.80	892.00				
			當期利益金	61.82			61.82
				288.50	288.50	7,681.82	7,681.82

出所：吉田 (1934, 137)

5. おわりに

本稿は、昭和前期の実科高女で使用された文部省検定教科書の一つである『女子簿記教科書』（吉田 1936）の分析と検証を通じて、当時の女性学習者の会計学教育の状況を探り、併せて SDGs 目標 4 およびジェンダーの視座から考察を行った。本書を現代語訳の上で進めた検証方法は、これらの視点に基づく詳細な分析を可能とした。

特にジェンダーの視座から、『中等簿記教科書』（吉田 1934）との比較分析の結果、両者に学習項目の量に大差は見られなかったものの、本書には伝票会計が独自に取り上げられており、これは当時、女性の会計・経理業務で伝票処理が重要な役割を果たしていたことを示唆しており、女性が専門的技能を習得し、社会に積極的に貢献することを促進する意図があった可能性が考えられる。

さらに、本書の外観や内容に関する視覚的要素についても分析を行った。『中等簿記教科書』の表紙が2色の幾何学的デザインであるのに対し、本書の表紙は女性学習者を意識した赤色を基調とし、色彩豊かな植物モチーフのデザインが施されている。このデザイン選定については、近年なされた「色に関する調査（2024年）」¹⁰では女性に最も好まれる色がピンクとされており、歳月を経てはいるものの、本書での色調選定に際して女性学習者に対し親しみやすさやアクセスの向上を意図した可能性があると考えられる。

また、教科書に掲載された画像や記述についても、視覚的要素が多く取り入れられ、簿記会計の現場の様子をさほど知らない女性学習者が教科書の内容をより理解しやすいように、また簿記が使われる会計実務の現場の雰囲気に関心を持てるようにという意図が働いていた可能性が考えられる。さらに、吉田が「はしがき」に述べていたように、例題演習重視の考えが本書に大きく反映されており、まず、入門として単式簿記の習得を目指し、続いて複式簿記に段階的に進む等、例題演習の質と量の両面において、学習の進展を考慮した構成も特徴的である。

これらの点は、現在 SDGs 目標4が謳う「すべての人が手頃な価格で質の高い教育にアクセスできるようにする」という目標に沿った動きであったと言える。

以上の考察を通じて明らかになった本書の特色とその歴史的背景の理解は、その後の女性公認会計士誕生や会計学領域における女性の職業的進展を論じる上で有益であると考えられる。また、国際社会の共通課題である SDGs 目標4（質の高い教育をみんなに）、さらに目標5（ジェンダー平等を実現しよう）の現代における意義について検討する際においても、本書に見られるような女性の地位向上に向けた教育実践が先駆的な試みとして約90年前のわが国で実施されていたことは、今後の研究においても重要な参考資料となり得ると期待される。

尚、会計史の視点からは未解明の事項が多くあり、これらの調査と史料の発掘が今後の課題である。

Submitted: September19, 2024

¹⁰ ジェンダーによる色に関する調査の詳細は下記を参照されたい。 <https://www.cross-m.co.jp/news/release/20240228/> as of 2024/09/17.

参考文献

- 福澤諭吉協会. 2023. 「特集『帳合之法』刊行一五〇周年」『福澤諭吉年鑑』.
- 原俊雄. 2018. 「簿記教授法の再検討—導入段階での教育を中心に—」『横浜経営研究』
38 (3・4): 88-97.
- 原田奈々子. 2023. 「『帳合之法』の意義と明治中期におけるわが国商業実践への西洋簿記の導入」『福澤諭吉年鑑』 50: 69-85.
- 橋本紀子. 1992. 『男女共学制の史的研究』 大月書店.
- 橋本紀子. 1995. 「男女共学制の歴史的研究の立場から」『日本の教育史学』 38. (教育史における女性：ジェンダーの視点から教育史を問い直す：教育史学会第 38 回大会記録).
- 橋本紀子, 逸見 勝亮. 2003. 『ジェンダーと教育の歴史』 川島書店.
- Hatfield, H. R. 1909. *Modern Accounting : Its Principles and Some of Its Problems*. D. Appleton & Co., (海老原竹之助訳. 1923. 『最近会計学』 博文館).
- 久井孝則. 2018. 「明治初期の簿記導入史の研究—森下岩楠と森島修太郎の簿記書を通じて—」『環太平洋圏経営研究』 19: 133-158.
- 女子大学講義発行所. 1929. 『職業別学校案内と婦人職業指導』 総文館.
- 小泉友香. 2024a. 『女子簿記教科書：会計学いにしえの旅：吉田良三』 現代語訳, 千代田文化舎.
- 小泉友香. 2024b. 「昭和前期の日本女性の会計学教育に関する事例研究 (II) —SDGs 目標 4「質の高い」教育と日商簿記検定・高校簿記との比較—」『Kyoritsu Business & Economics Review』 4(13):1-20.
- 小泉友香. 2024c. 「昭和前期の日本女性の会計学教育に関する事例研究 (III) —SDGs 目標 4「平等なアクセス」の視座からの考察—」『Kyoritsu Business & Economics Review』 4(14):1-19.
- 小山静子. 1991. 『良妻賢母という規範』 (初版) 勁草書房.
- 小山静子. 1995. 「良妻賢母思想研究の立場から」『日本の教育史学』 38. (教育史における女性：ジェンダーの視点から教育史を問い直す：教育史学会第 38 回大会記録).
- 小山静子. 2015. 『男女別学の時代: 戦前期中等教育のジェンダー比較』 柏書房.
- 小山静子. 2022. 『良妻賢母という規範 新装改訂版』 勁草書房.
- 小山静子. 2023. 『高等女学校と女性の近代』 勁草書房.
- 工藤栄一郎. 2015. 「会計学と阿久津文庫の形成」『産業経営研究』 34: 19-43.
- 工藤栄一郎. 2019. 「会計教育の開花と展開—明治時代」『会計基礎教育の歴史と現況』 18-43. 日本公認会計士協会出版局.
- 工藤 栄一郎, 柴 健 次. 2022. 「明治初期における商業教育制度化への道のり—大阪商業講習所の設立まで—」『会計教育研究』 10: 43-53.
- 工藤栄一郎. 2023. 「明治初期における簿記知識の社会普及と『帳合之法』および慶應義塾の貢献」『福澤諭吉年鑑』 50: 23-38.
- 黒澤清. 1982. 『日本会計学発展史序説』 雄松堂書店.

- 黒澤清. 1990. 『日本会計制度発展史』 財経詳報社.
- 松本喜一. 1938. 『女子簿記新教科書』 東洋圖書.
- 森富治郎, 折本安男, 繁田利男. 1935. 『女子簿記新教科書』 大正洋行出版部.
- 日本公認会計士協会. 2018 「公認会計士とは | 公認会計士について知る | 女性会計士活躍促進協議会の取組について」 https://jicpa.or.jp/cpainfo/introduction/cpa_women/about/ as of 2024/09/13.
- 日本公認会計士協会. 2019. 『我が国における会計基礎教育の歴史と現況』 .
- 太田哲三. 1956. 『会計学の 40 年』 中央経済社.
- 太田哲三. 1968. 『近代会計側面誌—会計学の 60 年』 中央経済社.
- 岡本清. 1986a 「一橋における原価計算・管理会計の歩み」 『一橋論叢』 95(4) 493-506.
- 岡本清. 1986b 「一橋における原価計算と管理会計」 『橋間叢書』 55 (昭和六一年九月二六日収録講演記録) .
- 小野澤義勝. 1936. 『実践女子簿記教科書』 大成書院.
- 佐々木重人. 2016. 『専修大学図書館だより』 89 巻頭エッセイ.
- 島本克彦. 2019. 「会計教育の定着—大正時代から昭和時代」 『会計基礎教育の歴史と現況』 44-80 日本公認会計士協会出版局.
- 篠藤涼子. 2020. 「明治期におけるわが国家計簿の展開」 『会計史学会年報』 (39), 45-57.
- 篠藤涼子. 2024. 「家計簿にみる記帳内容の展開」 日本簿記学会第 49 回全国大会発表要旨.
- 田島四郎. 1944. 「吉田先生の著作」 『一橋論叢』 14 (4・5) .
- 友岡賛. 2018. 「明治時代における会計教育と会計学の黎明: 日本会計通史・序説(3)」 『三田商学研究』 61(3):15- 30.
- 鳥居美和子. 1967. 『教育文献総合目録. 第 3 集 第 1 (明治以降教科書総合目録 第 1)』 小宮山書店.
- 渡部明. 1936. 『女子簿記教科書』 (初版・訂正再版) 三陽閣.
- 渡邊泉. 2017a. 『会計学の誕生—複式簿記が変えた世界』 岩波書店.
- 渡邊泉. 2017b. 『会計の歴史探訪 - 過去から未来へのメッセージ』 同文館出版.
- 吉田千草. 2000. 「貴重書紹介 ルカ・パチョーリ『算術・幾何・比及び比例全書』」 『明治大学図書館紀要』 4:119-134.
- 吉田良三. 1934. 『中等簿記教科書』 (修正再販) 同文館.
- 吉田良三. 1935. 『女子簿記教科書』 (初版) 同文館.
- 吉田良三. 1936. 『女子簿記教科書』 (修正再販) 同文館.
- 吉川鶴雄. 1936. 『女子簿記教科書』 帝国書院.